

再会、それから



親と子、兄と弟

24年の空白を越えて

日本海で遭難した漁船員とその家族

寺越さん一家の記録 Ⅱ

治島 啓

再会、それから



遭難

事件は27年前



昭和38年、石川県能登半島で漁業を営む寺越さん一家に災難が降りかかった。寺越嘉太郎さんの次男昭二さん、四男外雄さん、それに、長男太左エ門さんの息子で、孫にあたる武志さんの3人が漁に出ている途中、沖合で船の機関が故障。そこに他の船がぶつかり、3人は夜の暗い海に放り出され、行方不明になった。

24年の空白を越えて—— ——昭和六二年、感激の再会。

一通の手紙（外雄さん）から、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）に、全員救助されていたことがわかった。

すでに、父、嘉太郎さん、母、こきんさんは故人に、次男の昭二さんは現地で病気に倒れ、帰らぬ人になってはいたが、寺越武志さん（四〇）と寺越外雄さん（五一）は、北朝鮮亀城市で家庭を持ち、元気に暮らしていた。そして、関係者の努力と北朝鮮政府の好意で24年ぶりの再会が実現した。

「再会が予定されていた高麗ホテルの広間に入ったとたん、太左エ門さんは弟の外雄さんに、友枝さんは息子の武志さんに抱き合っていた。友枝さんの『タケシ…』という、うわずつた声が聞こえたと思ったら今度は大左エ門さんが武志さんと、友枝さんは外雄さんと抱き合い、暫く声もなかった。ただ涙が止めどなく流れていた。

私は、その再会に立ち合せて『よかった、本当によかった』と思わず咳いた。（鳴崎譲）





正枝さん、武志さん27年ぶり感動の再会(1)＝平壤市内、両江ホテル前

それから3年

北朝鮮への一筋の道がつけられたとはいえ、日本と国交のない北朝鮮は、まさに「近くて遠い国」。簡単に入国を許可される訳もなく、仮に入国が許可されても、一旦、北朝鮮と国交のある国へ行き、その国からの入国という厄介な手続きをふまねばならない。

武志さん（現地名・金英浩）、外雄さん（現地名・金哲浩）の生存が確認され、再会もはたせたが、それから3年、手紙のやりとりさえ思い通りにいかない日々を過ごさねばならなかった。

そして、太左エ門さんと友枝さんは再会をはたすことができたが、武志さんの実妹、泉谷正枝さんは未だ実兄武志さん、叔父外雄さんとの再会をはたしてはいない。

もちろん、寺越さん親娘が再会を熱望しているのはいうまでもない。

「再会」ふたたび

再会、その機会がおとすれた。3年前同様、今度も石川県選出の代議士であり、日本社会

党の朝鮮問題対策委員会の事務局長でもある鳴崎譲代議士の努力が実を結んだ。

考慮の結果、衆議院議員島崎ゆずる事務所の秘書団に寺越さん母娘が同行、という異例の訪朝団が編成された。

平成2年8月6日成田空港出発、同7日、北朝鮮到着。翌8日夕、寺越さん母娘は、平壤市内の両江ホテルで武志さん、外雄さんとその家族らとの再会が実現した。

ホテルでは武志さん、外雄さんの子供5人が正枝さんらに覚えてたの日本語で「おばあちゃん、おばさん、こんにちは」と語りかけた後、かいがいしく水や果物を運び、武志さんの長女景淑ちゃん（一一）と外雄さんの長女明心さん（一五）が早速得意のアカordeイオン、ギターで「統一の歌」や「アリアン」などを演奏してみせた。友枝さんは孫らの成長ぶりに時折、目頭を熱くし、正枝さんも「上手ね」と繰り返し拍手を送った。

夜は別々に宿泊したものの11日朝、友枝さんらが平壤空港を離れるまで、水入らずのひとときを過ごした。

※以後、訪朝に同行取材した北国新聞東京支社の山本正美記者による「北」へのきずなを改めて掲載します。



正枝さん、武志さんの27年ぶり感動の再会(2)

「北」の斗はずが

嶋崎訪朝団に同行して

北国新聞東京支社報道部・山本正美



また会う日を誓い別れを惜しむ正枝さん(左)と兄、武志さん＝11日、北朝鮮平壤空港



平壤市街

揺れる国際情勢にほんろう —無事確認から3年の歳月—

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）で暮らす肉親との対面を果たした金沢市八日市町三丁目、主婦寺越友枝さん（五九）と長女の同所、主婦泉谷正枝さん（三七）は七日から十日までの北朝鮮滞在中、時の流れを惜しむように再会の喜びを心に刻み、また会う日を誓い合った。その間、北朝鮮との橋渡し役を務めた社会党の嶋崎讓代議員は朝鮮労働党幹部らとの政治会談を通じて日朝関係改善の糸口を探った。それはとりもなおさず寺越さんから肉親の願う自由な交流への道と同時に、日朝国交正常化、ひいては南北分断状態にある朝鮮半島統一に向けた隣国・日本の果たすべき役割の模索でもあった。

27年目の対面

泣かないと言っていた正枝さんの目から大粒の涙がこぼれた。「会いたかったよ、お兄

ちゃん」。寺越武志さん（四〇）

英浩、北朝鮮亀城市在住もまた正枝さんの手をぎゅっと握り締め「苦勞かけたね」との言葉を絞り出した。八日夕、正枝さんが平壤市内の両江ホテルで二十七年ぶりに兄武志さんと対面した瞬間だった。

それにしても母親の友枝さんが二十四年ぶりに武志さんと対面し無事を確認してからはや三年が過ぎていた。家庭を持ち子育てに追われる正枝さんは「兄が元気なことがわかっただけで幸せ」と控えめではあったものの、内心はいち早い再会を熱望していたことは想像に難くなかった。

もともと、朝鮮半島、とりわけ日朝関係は樂觀を許さない状況が相次いだ。「富士山丸事件」に続いて昨春秋、中山外相が国連総会で北朝鮮、韓国の国連加盟問題について従来の「南北双方」の立場を変えて韓国の単独加盟も基本的に支持する意向を示唆した。さらに

欲が見て取れた。

わが子に思い託し

武志さんは正枝さんらとの語らいのなかで自らの訪日よりもむしろ「子供たちを立派に育て日本へ技術交流で訪ねさせたい」とわが子に思いを託し、正枝さんも大きくうなずいた。

兄と妹妹の再会という喜びのなかで肉親の情がほんろうされ続ける国際政治情勢の冷厳な現実もまたそこにはあった。



外雄さん一家＝平壤市内の公園

帰国の希望は口にせず —いちずに「朝鮮人民」誇る—

「正枝は性格が明るいからな。本当に安心したよ」「私は幸せだから明るい。お兄ちゃんも一度日本に来てよ」。昭和三十八年に日本海で行方不明となった後、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）で暮らす寺越武志さん（四〇）

と実妹の金沢市八日市町三丁目、主婦泉谷正枝さん（三七）は二十七年ぶりの再会翌日の九日午後、平壤市内の公園の湖でボートに乗りようやく二人きりで互いの思いの丈を語り合った。

〇）現地名・金英浩、北朝鮮亀城市在住



再会直後、武志さん(右から2人目)らと笑顔で語り合ひ友枝さん(右)ら⇒8周年後、平塚市内のホテル

交歓に絶えず「目」

武志さんや同じく遭難して北朝鮮で暮らす寺越外雄さん(五一)―現地地名・金哲浩―の子供たちが対面のうれしさのあまりしみじみとした語らいを妨げるほどにはしゃぎ回っていた。加えて何より対面場所には必ず朝鮮労働党の担当者一人が付き添って、肉親の交歓を絶えず注視しており、それを意識せざるを得ない状況の中では、互いの胸中をさらけ出すことはばかれた。

もつとも、再会そのものが朝鮮労働党側の異例とも言えるほどの配慮があったればこそ実現したことも事実である。今回の訪朝団は同党国際部の招待であり、総勢十人の団員は原則、同一行動を求められていた。武志さんの母親友枝さん(五九)と正枝さんの二人が一行と分かれ武志さんらと対面、交流しているとき、一行に付き添う担当者の一人が「彼女らは今、たまたま自由時間なのですよ」と笑顔を見せた。一方、武志さんらにしてみてもちよつと平壤市へ出張にきた格好になっていたのである。

「二、二年が節目」

北朝鮮、韓国双方とも事あるごとに祖国統一を国内外に叫び続けてきた。その朝鮮半島を巡る国際情勢は激しい変化の時期を迎えたとされており、社会党朝鮮問題対策委員会事務局長の嶋崎氏も「こころ、二年が大きな節目の時期」との見方を強めている。

実際、北朝鮮の最大の支援国であるソ連と韓国の両国がことし六月、米国で首脳会談を持ったのをはじめ、南北分断後、初めての南北首脳会談が九月に開かれる方向にある。

もつとも、そのいずれの動きも朝鮮半島の平和と統一へ有利に働くかは全く不透明であり、韓ソの首脳会談で両国の国交樹立や北朝鮮の開放と改革に協力することが合意されたことは半面、北朝鮮をさらに国際的孤立に追いこむ危険性もはらんでいる。

韓ソ首脳会談について北朝鮮側は即座に「二つの朝鮮を策動するもの」と非難し、金養建朝鮮労働党国際部副部長も訪朝団一行への歓迎宴の席上、「南北分断、二つの国の固定化につながるいかなる動きにも断固反対す

武志さんらは友枝さんらとの語らいのなかで「この国の人はみんな親切。病気のときも心配はなく、子供たちは伸び伸びと育っている」と説明して見せた。さらに事あるごとに「偉大な金日成首席と親愛なる金正日書記の優れた指導のもと、国民一人一人が力を合わせている。だから自分もこの国で頑張る」と強調、胸に付けた金首席の肖像入りのバッジを誇らしげに示した。

ただ目頭を熱く

友枝さんらにすれば、幸せに暮らしている

祖国統一の願いは強くも

―かみ合わぬ「南」との認識―

朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の対外関係最高責任者である金容淳朝鮮労働党国際部長が静かな口調のなかでひととき力を込めた。「私たちは国が分裂し家族が離れ離れになることが世界で一番嫌いな民族です。朝鮮統

という息子らの姿にただ目頭を熱くするだけだった。さらに友枝さんらが長年の悲しみを強いられた原因である武志さんらの北朝鮮在住の経緯は、友枝さんらが最初に尋ねたとき、武志さんらが言葉を濁して以降、滞在中は二度と話題に上ることはなかった。

武志さんが帰国の希望さえ口にせずいわずに北朝鮮人民になりきろうとする姿には複雑な事情も推測される。「武志、頑張れよ。くじけるなよ」。滞在期間中、わが息子に友枝さんが心の中でつぶやき続けた言葉だった。

一日は必ず来ます」。北朝鮮を友好訪問した嶋崎譲代議員、金沢市八日市町三丁目、主婦寺越友枝さん(五九)ら一行を招いて金部長が十日催した昼食会での同部長のあいさつ冒頭の言葉である。



金容淳朝鮮労働党国際部長(右)と歓迎昼食会で懇談する嶋崎代議員=10日、平壤市の高麗ホテル

る」と強調した。さらに金容淳国際部長は「米国はわれわれが国家建設より戦争準備を進めているというが根も葉もないこと。われわれは戦争に絶対反対である」と対米不信をのぞかせた。

人的交流は不発に

鳴崎氏ら一行が七日から十一日まで北朝鮮に滞在した期間はちょうど十五日に同国が支持し板門店で開催予定だった「全民族大会」の直前であり、平壤空港や平壤駅でも同大会に参加するため来朝した海外同胞を歓迎する人の輪を目にした。そこには「祖国の平和と統一を果たそう」との熱気がみなぎっていた。その「全民族大会」は南北自由従来のもとでは不発に終わったうえ、韓国政府が提唱した同時期の「民族大交流」も実現せず、南北当局間の相互不信を深めただけに終わった。北朝鮮で暮らす息子を持つ友枝さんは朝鮮半島の平和が息子の幸せ、さらには自由に息子と会えることにつながるの思いを一層強くし、金部長の一連の言葉の一日も早い実現を祈らずにはいらなかった。

自力の国づくりを堅持 ——市場経済、かたくなに拒む——

二百万都市・平壤市内は今、建設中の高さ三百メートル、百五階建てのピラミッド形ホテルが次第に全ぼうを現すなか、二万世帯の入る高層アパートが建ち並び、さらに五万世帯分が二年後の完成をめざし急ピッチで造成中だった。同市南西約六十キロの大同江河口に総工費

四十億をかけて四年前に完成した多目的ダム「西海閘門（さいかいこうもん）」の見学者案内所では「わが国経済の潜在力を發揮して建設された」との紹介ビデオが流されていた。

朝鮮労働党の金容淳国際部長は十日の昼食会の席上、同国で暮らす息子・寺越武志さん（四〇）「北朝鮮亀城市在住」と再会を果たした金沢市八日市三丁目、主婦寺越友枝さん（五九）に「武志さんもひと役かっていますよ」との言葉を添えて平壤の発展ぶりを語った。また、金養建同副部長は同日夜の答礼宴で、火力発電所の燃料を豊富な国内の石炭で賄ってきたため石油ショックを免れたことな

どを引き合いに、同国の経済路線である「自力的経済体系」の素晴らしさを強調した。そこには国際経済社会のなかで外国からの資本や技術の導入よりも、むしろかたくなと言えるほどの自力による国づくりの姿勢が読み取れた。

もっとも、北朝鮮経済そのものについてはわが国外務省が昨年九月の「外交青書」のなかで「技術的立ち遅れ、生産設備の老朽化、過大な軍備負担などにより種々の困難に直面している模様」と指摘しているように、平壤市内の活況ぶりとは裏腹に国全体の経済見通しに楽観を許さない見方が西側諸国を中心に取りざたされている。

鳴崎議代議員は十日、同国政府の計画経済担当の首脳らと経済政策について突っ込んだ意見を交換した。鳴崎氏は中国が社会主義的計画と市場経済、外資の導入により資本の蓄積を進めていることを説明したうえで「北朝



近代化が進む街並みで職場に働く労働者ら＝11日朝、平壤市内

鮮も世界の資本の流れに入り市場経済も導入していくことが早晚、課題となる」との認識を示した。同責任者らは鳴崎氏の指摘を「検討すべき課題」としながらも、やはり今後も自力による社会主義建設の方針の堅持に力を込め、鳴崎氏は討論を終えて「北朝鮮側はまだ問題意識を十分自覚するまでには至っていないようだ」と周囲に漏らした。

政策にもどかし

南北統一には北朝鮮が国際的にも抜群の経済力を誇る韓国との経済的格差を縮めることが重要な課題であると鳴崎氏は分析し、同時に北朝鮮が豊富な地下資源や高い教育水準などから推して国際経済社会のなかで十分な対応力があると見立てる。それゆえに、同氏は同国人民の国づくりにかけるいちはずさに接するたびに、閉鎖的ともいえる現在の経済政策にもどかしもまた抱かざるをえなかった。

党レベルから政府レベルへ ——日本の正常化意欲に評価も——

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）に住む息子の寺越武志さん（四〇）——現地名・金英浩——との再会を果たした金沢市八日市三丁目、主婦寺越友枝さん（五九）や鳴崎讓代議士ら訪朝団一行が北朝鮮を離れる前日の十日夜、北朝鮮側関係者を招いて催した答礼宴でのことである。鳴崎氏が朝鮮労働党国際部の金養建副部長にやんわり「武志君が仕事に頑張り日朝両国の友好運動に力を尽くせば、日本にされるようになりますね」と念を押すと、金副部長は「朝日関係がさらに友好になれば、それも可能でしょう」と答え、武志さんの来日は今後の日朝関係次第であることを図らずも明らかにした。

政治的合意の機会

日朝関係を巡ってはこのところ関係改善に

向けた動きが活発化し、金丸元副総理、田辺社会党副委員長をそれぞれ団長とする代表団が九月にも訪朝する見通しである。今回、鳴崎氏が訪朝したのも実は社会党朝鮮問題対策委員会事務局長として、北朝鮮側の両訪朝団受け入れの真意を確認し、その手順を詰めるためであり、金容淳朝鮮労働党国際部長と十日午後に行った会談は二時間半余に及んだ。金部長はまず、両訪朝団の「先遣団」との予備会談には合意していないとしたりうえて、金丸氏らの訪朝を「党レベルでの日朝国交正常化に向けた大枠の政治的合意を得る機会」と位置づけ、「富士山丸事件」はその後の政府間レベルの段階で解決できる、との見通しを明らかにした。同部長にすれば、同事件の解決を前提にした訪朝という自民党側の期待を拙速過ぎるとクギを刺した格好ながら、日本側の日朝関係改善への動静には「冷や水をか

けることはあってはならない」と評価し、鳴崎氏は、「両代表団の訪朝から国交正常化の動きが始まるのであり、ぜひ成功させてもらいたい」と配慮を求めた。

同国からの帰路に北京で鳴崎氏が会談した中国共産党対外中央連絡部（国際部）の朱良部長は中国の基本姿勢として経済的には韓国と結びつきながらも政治的には「北朝鮮のマインナスになるようなことはしない。北朝鮮自身の変化を待ち、即座に対応する」との認識を示した。その認識は、北朝鮮の日本側に対する要望を代弁しているとも受け取れ、鳴崎氏自身も「日本は少なくとも南北双方に中立の立場に立つべきだ」との持論を再確認した。金部長は十日の昼食会で友枝さんらに「武志さんらのことは何も心配する必要はありません」と胸をたいた。とはいえ、友枝さんにとって心から安心できるのは日朝間に「平和のかけ橋」が架かる時であり、その日があるまで「武志のためにも長生きしたい」というのが友枝さんの偽らざる気持ちであった。



金朝鮮労働党国際部長(左)に息子をよろしく頼む友枝さん(右)と長女の正枝さん。10日昼、平壤市の高麗ホテル

新たな任務をもち

朝鮮民主主義人民共和国を訪ねて

衆議院議員

増島博

には私なりの判断があった。

その一つは、日本社会党代表の訪朝団が七月下旬に予定されていたこと、この党の代表団の訪朝を機に、日朝関係改善への新たな動きが予想されたこと、自民党を代表する形で秋には自民党元副総理金丸信さんを同行させる工作もはじまっていたことなどである。

いま一つは、三年前に寺越親子の対面を実現させてから、寺越さんがもう一度北朝鮮に在住する息子さん、旧日本名寺越武志君との再会を強く願っておられたのを知っていただけに、今年こそは再度面会の機会を与えてあげたいとひそかに考えていたことである。

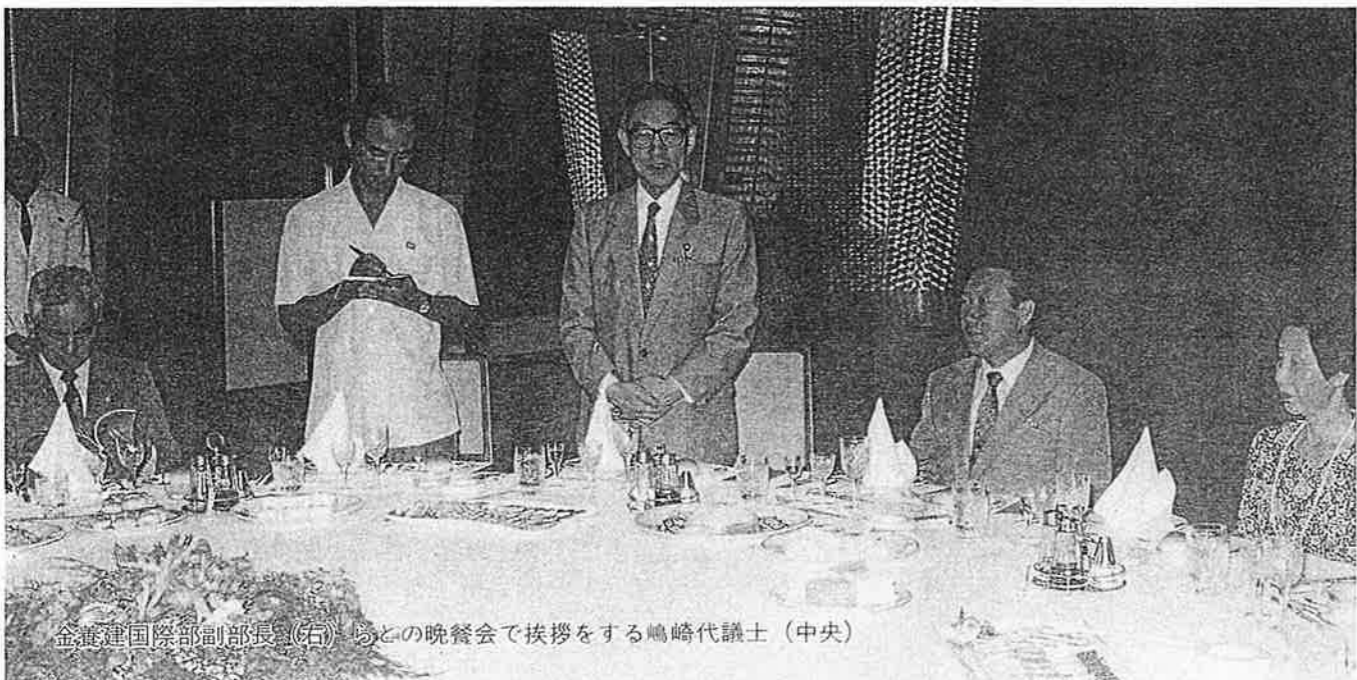
七月予定の党の代表団に加われば寺越さんを同行できない。とすれば、党の代表団のあとをうけて訪朝し、金丸・田辺訪朝に当たっての朝鮮労働党側の反応と対応、それをうけての党の対政府・自民党交渉への対応策をさぐる任務と並行させて、寺越親子の再会を実現するしかない。そこで八月初旬を訪朝の時期と決断した。また、八月中旬から九月上旬までは、「日朝親善友好の船」の訪朝計画が動き出すため、朝鮮労働党側はその受け入れでも忙をきわめるであろうから、その谷間とでも

一

九月二十八日、平壤市で、朝鮮労働党、自由民主党、日本社会党との間で調印された歴史的な文書「共同宣言」が発表された。金丸、田辺両氏を団長とする自・社の訪朝団の成功を陰ながら祈るような気持ちで見守っていただけに、本当によかったと心から安堵した。実は、この成功にむけて、八月初旬訪朝し、社会党の朝鮮問題対策委員会事務局長として黒子の外交として、その橋渡し役の任務を果たしていたからである。その訪朝時に、金容淳書記（現国際部長兼任）と交わした約束通りに事態が進行するかを案じていたからでもある。七年越しの富士山丸の紅粉船長らの釈放と帰国のメドも着いた。この日のために日朝親善友好に努力してきた甲斐があったと感慨もひとしおである。

八月六日東京をたち、北京経由で七日に北朝鮮の平壤に入り、七日から十一日まで滞在した。その後北京にもどり、大連経由で帰国した。

このような旅行の計画をたてたのは六月下旬であった。八月初旬を訪朝の時期と決める



金滬建国際部副部長（右）らとの晩餐会で挨拶をする嶋崎代議士（中央）



いえる時期、八月初旬が一番よいとも考えたからである。

寺越さんの願いを実現するという目的の訪朝団にすればマスコミからの取材合戦にも巧みにのがれられ、党の任務という黒子の役もカムフラージュできる、という読みもあった。ただ取材熱心で、毎日のように国会の事務所にあられる北国新聞の東京支社の山本正美記者には、密かに進めていた朝鮮総連や本国の労働党との連絡中の事実がつかまれてしまったため、彼には隠し切れず、彼の同行の約束と引き換えに極秘に事を進めることとなった。結果としては、山本記者のおかげで北国新聞を通じて石川県民に私の訪朝の活動をちくいち報道していただき感謝している。

これらの判断と事情が重なって、衆議院議員島崎事務所の秘書団と寺越さんの母・娘の同行という、いまだかつて例のないタイプの訪朝団編成となった。予定通りの訪朝・訪中を成功させていただいただけでなく、破格の待遇の御招待を受けえたのは、朝鮮労働党国際部、並びに中国共産党中央対外連絡部からの温かい御配慮のお陰と心から感謝している。

鮮外交を進めていきたいと考えておるところでありまして、朝鮮民主主義人民共和国との間においても、朝鮮半島をめぐる新たな情勢に配慮しつつ、さきの認識に立脚して関係改善を進めていきたい。

政府は(中略) 日朝関係の諸懸案のすべての側面について、前提条件なく話し合いをしたいとの希望を表明しているところでございますが、できる限り早期に対話が実現し、双方が誠意をもって話し合いを行うことを期待しております。(傍点・筆者)

日朝関係改善にむけてこの重大な発言に踏み切られるには一つの背景があった。竹下さんは私の義兄にあたるのが縁となった。党の政策審議会長当時から国の予算をめぐって時々相談にのって戴いた経緯もあって、党の朝鮮問題対策の事務局長を引きうけて以来、竹下さんの力を借りて、日朝関係打開に努力しようと考えていた。三年前の七月、第一回の「日朝親善友好の船」(団長田辺誠、事務局長嶋崎謙)を計画したとき、竹下さんと相談して、将来、日朝関係改善の政府側の要人として活躍いただく必要があると判断するので、金日成主席への贈り物をお願いした。竹下さ

昨年(一九八九年)、三月三十一日衆議院予算委員会における社会党の村山君の質問に答えた竹下前総理の発言が、今回の金丸・田辺代表団の成果にいたる日朝関係改善のための公式的な外交交渉のはじまりであった。発言要旨は次のようである。

「日本政府及び日本国民は、過去における我が国の行為が近隣諸国の国民に多大の苦痛と損害をあたえてきたことを深く自覚して、このようなことを二度と繰り返してはならないとの反省と決意のうえにたつて平和国家としての道を今日まで歩んできたわけでございます。(中略)

朝鮮半島をめぐる情勢が新たな局面を迎えておりますこの機会に、改めて、同地域のすべての人々に対し、そのような過去の関係についての深い反省と遺憾の意を表明したい、このように思います。

日朝関係について申しますならば、そのよくな過去の不幸な時期の後も今日にいたるまで疎遠であったことも事実でございます。政府としては(中略)新たな決意を持って対朝

んは、それに心よく応じて下さった。あえて、竹下さんに無茶なお願いをしたのは、当時は、中曽根内閣が崩壊を目の前にし、誰が次期総理に指名されるか予断を許さない情勢にあり、竹下総理が実現すれば日朝関係改善への扉を開きうる可能性があることを期待していたからである。

寺越さんの親子対面を成功させた直後、一時、健康を害し入院していたとき、竹下総理が実現した。私に代わって、家内が竹下邸に御祝いの品をお届けしたことをいま思い出している。

竹下内閣の誕生を契機に、機をみて、日朝関係改善の相談をもちかけねばなるまいと考えていた矢先に、大韓航空事件が発生し、それに対する制裁措置を余儀なくされ、日朝関係は冷え切ってしまった。しかし、その直後から、韓国では盧泰愚新大統領が誕生し、民主化へのあらたな胎動が始まったのである。韓国における民主勢力の前進も手伝って、朝鮮半島の南北の緊張緩和の方向が模索されはじめたのをうけ、わが党の要請もあって、竹下さんは北朝鮮への制裁措置解除に踏み切られた。それには、社会党の山口書記長訪朝



予備会談に臨み金養建国際部副部長(右)と握手をかわす島崎代議士(左)

団の訪朝への配慮もふくまれていた。一九八八年九月のことである。

予算委員会における竹下さんの発言、また金丸・田辺訪朝団の帰国に際し、お迎えにでられた竹下さんが、記者団の質問に一言「何も言うことはありません。御立派でした。」と答えられ、乾杯の音頭をとられたが、その時も、これらの経過を深く噛み締めての心境であったろうと、私は推察している。

「竹下発言」をうけて、昨年四月の田辺団訪朝、日朝漁業協定再締結にむけての昨年九月の島崎団訪朝、これらの社会党と労働党との交流が今回の成果につながるための努力であった。

三二

七月の日本社会党訪朝団(久保団長・田辺顧問)と朝鮮労働党との間で日朝関係改善にむけての重大な合意が成立した。

その要旨は次のようである。

(一)日朝関係改善の前提は、(1)三十六年間の植民地支配に対する反省と贖罪であり、(2)その償いとしての賠償である。さらに戦後四十年以上を経た今日まで、両国政府は現在もな

お非正常なままであり、共和国にたいする敵視政策と非難されてきた非友好的な政策を転換することである。そのあかしとして、(3)当面、両国間に連絡事務所を設置し、東京―平壤の直行便開設、通信衛星の利用、旅券における差別条項や、在日朝鮮人の人権の保証などの具体的措置を構ずること。

(二)富士山丸事件については「誠意をもって、双方が(一)の一般的な討議を深める過程において、人道主義的に解決することができると」

(三)九月下旬、自民党金丸副総理、社会党田辺副委員長をそれぞれ団長とする自・社の訪朝団に合意したこと。

これら三つの点の合意事項が帰国後発表されるや、政府、外務省、自民党などへの影響は大きかった。マスコミもそれらの動向をめぐり、憶測記事をも含めて連日大きく報道された。特に金丸さんは、富士山丸問題に決着がつく見通しのない状況のもとでは訪朝しない、と強く発言していた。このような日本国内の反響を朝鮮側は詳しく検討しているに違いない。訪朝を前にして、私の懸念は募るばかりであった。訪朝前の八月三日、久保副委員長(社会党朝鮮対策委員長)と打合せ、朝

鮮労働党側のその後の反応、合意事項の真意などをあらためて探る任務をもつことを約束した。竹下さんにも訪朝の任務を伝えておいた。

平壤での八月八日、午前と午後にかけての七時間におよぶ金養建国際部副部長との予備会談、八月十日午後三時―六時までの三時間にわたる金容淳書記(国際部長兼任)との政治会談はそのために行われたのである。

これらの会談で私が明確にしたかったことは、(二)の合意事項、①「日朝関係改善のための全般的討議が深められる過程で」富士山丸問題は、②「人道主義的に解決することができるといふ①と②が、金丸・田辺訪朝に当たるとのように進展するかにあった。この点について、長い会談の末、金容淳書記は朝鮮労働党側の対応について明快に答えて下さった。

①については、さきに述べた朝鮮労働党と社会党との間の(一)の合意事項の三点の内容をはつきりさせること、つまり、日本政府が朝鮮人民に対し、「過去の不幸な時期とその後の今日にいたるまで疎遠であったこと」(竹下前総理の予算委の発言)への「深い反省と遺憾の意を表明すること」(竹下発言)、さらにそ

の賠償、当面の懸案の具体的措置事項の解決という、三つの問題点を深める討議を意味している。その討議が金丸・田辺訪朝団の手によって、双方、誠意をもって話し合えば②は解決できるということである。

金容淳書記は私に次のように約束された。「三つの課題で、朝鮮労働党、自由民主党、日本社会党との党レベルにおける大枠の方向が了解できれば、その後、政府間の接触がはじまり、その段階で、富士山丸事件にかかわる二名の釈放は実現できる。」

この約束は、訪朝前に金丸さんが発言していたように、訪朝時に富士山丸事件の決着を一段階で一挙に片付けられることを期待するのではなく、あくまで二段階で処理されるという手続きを意味していた。

帰国後、直ちにわが党の久保亘「朝対」委員長、ならびに竹下登元総理に、この真意を伝え、金丸さんが社会党とともにともかく、訪朝を決意して戴き、朝鮮労働党との会談のテーブルにつくことがすべてを解決する鍵である旨を報告した。金丸さんが「日朝関係改善」へと決意されることが大切なので、出発まえは、富士山丸問題を前面にだされないこ

とが肝要であると判断し、金丸さんにその真意を伝えて戴くための工作に全力を尽くした。こうして(一)の合意事項の三点が「共同宣言」にもりこまれ、海部総理の金日成主席への書簡が「反省と遺憾の意を表明」のあかしとされたのである。

しかし、賠償の考え方と時期をめぐって、金丸・田辺訪朝団を契機に、「日朝関係改善」から、「日朝国交回復」に向かって急変した。私との会談当時も、またその後、金丸・田辺訪朝時まで、誰一人として国交回復への扉が開くような事態に発展することは予測できなかった。この変化は、交渉に当られた金丸さんの一つの決断の結果であったと言ってよい。今後の南北朝鮮の進展にとってこの時期におきた変化が良かったか悪かったかは、歴史の進展をみるしかないが、私たちの成すべきことは、朝鮮半島の緊張緩和と南北朝鮮の自主的平和統一への努力を更に続けることであろう。その評価は後世の歴史家の判断にまかせられるしかない。

四

八月十一日、平壤から北京に帰り、その日

民主主義人民共和国も、南の資本主義国、韓国をかかえて、将来統一問題を処理しなければならぬからである。

朱良先生は、「当面、『共和国』にとってマイナスにならない外交的配慮から、韓国が提案しているソウル、北京双方への貿易事務所を設置、韓国から北京への政府使節団の派遣要請には応えていない。」と語られたあと意味深長な発言をされた。

「しかし、朝鮮半島に変化がおきた場合、私たち政治家は、その変化にすみやかに決断するしかない。」と。

この意味について再質問する余裕のないまま会談を終えた。

いまにして思えば、この変化が始まろうとしている。金丸・田辺訪朝団を境として日朝間に国交回復の外交が始まり、これを機に韓国でも中国にむけて国交回復の交渉に入るための攻勢にではじめたからである。

日本が北朝鮮を認め、もし、中国が韓国を認めるということになれば、南北朝鮮を別々にクロスして承認することになる。北朝鮮は今日まで、このようなクロス承認を朝鮮半島の分断固定化であると主張し、強く反対して

の午後四時から六時過ぎまで、池田秘書の同行も認められ、中国共産党対外連絡部長(国際部)朱良先生と会談した。中国側の対朝鮮外交の今後についての考え方を学びたことからである。

朱良先生から教えて戴いた中国の対朝鮮外交の基調はこれまた極めて明快であった。「中国をめぐる国家間の関係は、今日、過去のいつよりも良好に進展している。中・ソ関係において、対モンゴル、対インド、対インドシナ、対シンガポールなど国境を接する国々すべてにおいてである。隣国、対朝鮮外交はこれらの外交のなかの一つである。」と述べられ、時点々々でそれらの国々のうちどこに力点をおいて外交を進めるかを判断している。

「現在の対朝鮮外交の基調は、朝鮮民主主義人民共和国の同志や共和国が進めている外交にとってマイナスにならないことをすることである。」と固い決意を述べられた。

朝鮮半島問題と中国とは同じ性質の問題を課題としている。中国にとっては、台湾、香港という資本主義体制の地域をかかえて、今後の統一問題を考えなければならぬ。朝鮮

きたが、日朝関係では確実にこの方向に向かって変化が生まれてきた。この変化は、朱良先生が語られた「変化」であるとすれば、

こんご中国の朝鮮半島政策に一つの決断を迫る事態に発展したといえるのではないかと思う。だとすると、朱良先生の言われる「朝鮮民主主義人民共和国の同志や共和国にマイナスにならない外交的対応」とは何だろうか。慎重に見極め、注目していかなければならない。

この際、いま一つ忘れられない朱良先生の言葉を紹介しておきたい。それは、「アジアの問題はアジア人の手で解決すべきことである。」と述べられたことである。その際の「アジア人」には米国とソ連は含まれていないと、会談の過程から私には感じられた。この言葉の意味することを、思慮深くとらえかえしながら、朝鮮半島、日本、中国など、アジアにおける平和と軍縮、平等互恵と経済の共存共栄を今後とも模索していかなばなるまい。

五

日朝国交回復への扉が開き始めたことを機に、寺越さんの御家族の母子、兄妹の再会への私の努力も、一つの任務を終え、新しい対



金容淳労働党国際部長(右中央)と嶋崎代議士のグローバル視点になった政治会談



再会、それから



武志さん、外雄さんの子供たちの歌と演奏に目を細め聴き入る
友枝さん、正枝さん(中央)ら=平壤市内・両江ホテル

写真・資料提供
北国新聞社

衆議院議員 嶋崎 讓

略 歴

大正14年、石川県小松市に生れる。元九州大学法学部教授。昭和47年、衆議院議員初当選以来連続7期。社会主義理論センター事務局長、日本社会党政審会長を経て、現在、朝鮮問題対策委員会事務局長。

編集・発行 嶋崎ゆずる事務所
〒920 金沢市芳齋2-15-15
TEL.0762-23-6641



応の仕方を考える時期に入ったように思う。
今日までは、私を介して、朝鮮労働党の御招待の手続きをとらねば、再会できなかったが、これからは、日朝間の人事往来も公的に可能になる時代に入ろうとしているからである。寺越さん御家族の方々が北朝鮮を訪ねようと思えば、私の手を借りずに、訪朝できる日がそう遠くなく訪れるであろうと思う。そ

の意味では、私の日朝親善、交流のための努力もいささかの意味があったと改めてかみしめている。
あと残された事は、寺越外雄さん、武志君の戸籍上の処理である。一方的に「死亡」とされている戸籍上の誤記を訂正する手続きをとれるようにしてあげたいと思っている。国交回復への道はその可能性の道でもある。

訪朝日程

- 1990年
- 8月 6日 10:30 成田空港発⇨北京空港着
 - 7日 15:15 北京空港発⇨平壤空港着
 - 8日 午前午後 嶋崎代議士、金養建労働党国際副部長と予備会談
 - 16:00 寺越母娘再会(両江ホテル)
 - 9日 終日 平壤市内にて寺越さん家族対面
 - 10日 午後 嶋崎代議士、金容淳労働党国際部長と政治会談
 - 12:00 金容淳部長招宴(高麗ホテル)
 - 11日 9:30 平壤空港発⇨北京空港着
 - 午後 嶋崎代議士、朱良中国共産党対外連絡部長と政治会談